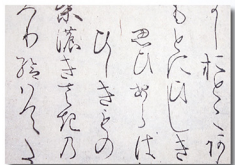


嵯峨本『伊勢物語』2冊



日本の書籍の歴史を辿ると、一部の仏書などは比較的早くに活字や製版で印刷され流布したが、和歌や物語などの文学は原則として筆写（写本）で伝えられてきた。室町時代末頃からキリシタン版や朝鮮版の影響下に、仏書以外の文学作品も活字・製版印刷に供されるようになるが、「嵯峨本」と通称される一群の活字本は、そうした日本の印刷の創生期を伝える貴重な資料である。

「嵯峨本」とは、当代一流の文化人であった角倉素庵（1571-1632）^{すあな}本阿弥光悦（1558-1637）^{みつえつ}の周辺で作成されたと考えられている活字印刷本で、筆写体を模すような優雅な連綿活字（2文字以上の連続した活字）を用い、料紙には染色や雲母刷りなどの典雅な装飾が施されているものが多く、古くから美術品としても愛好されてきた（但し、デリケートな装飾のため現状では退色しているものも多い）。

印刷物という去何千部も作成されたように思われるかもしれないが、贅をこらした当時の印刷物は制作者の周辺にのみ流通させるために作成されたと考えられている。一回の印刷部数は数部から十数部であったと推測され、現存部数も極めて少ない。

本学正宗敦夫文庫に所蔵される嵯峨本『伊勢物語』（K6-2）は、活字本研究（川瀬一馬『増補 古活字版之研究』による分類）において第2種と類別される早い段階の刷りを伝える伝本（後刷になると活字の摩耗や欠損により印面が乱れる）で、巻末に中院通勝（1556-1610）の自筆の花押（サイン）を据える名品である。物語本文の合間に添えられた愛らしい挿絵は、江戸期を通して出版され続けた製版本『伊勢物語』や各種の伊勢物語を主題とする絵図の構図にも流用されるなど、古典のビジュアルライズに大きな影響を与えた。（文学部准教授 海野圭介）